

巻 頭 言

借りることと返すこと

30年ほど前、ある漁業協同組合から大量の仕切書を借りたことがある。魚市場での競りを記録した伝票の束である。誰が、いつ、何を、どれだけ漁獲し、それらにいくらの浜値がついたかわかるものだ。地域漁業の姿を理解できる貴重な資料であった。今なら、個人情報として、とても借りだせるものではないだろう。職員さんは、借用証も求めず、自宅へ送る梱包まで手伝ってくださった。5,000枚以上の綴りをコピーするのにそれほど時間はかからなかった。ところが仕切書はそれから1年間、自宅に置いたままにしてしまった。後年、民俗学者の宮本常一によるエッセー「調査地被害―される側のさまざまな迷惑」を繰り返し読むたびに、このことを思い出した。研究を錦の御旗にして、調査される側の論理を一顧だにしない行為であった。

今春、大学図書館が数十年にわたって収蔵してきた段ボール箱10数箱におよぶ近隣都市の大正・昭和初期の行政資料を、当の市へ返却することになった。旧役場が廃棄処分したものを譲り受けたのか、はたまた誰かが借りだしたのか。長い時間を経過した今、来歴すらわからない。歴史学者の網野善彦が『古文書返却の旅』で語ったいくつものストーリーが浮かぶ。身勝手ではあるが、本学が保管し散逸を免れてきたことに安堵しながら、十分に活用されずにきた状況を残念に思う。これから公立図書館に収められ、市民や研究者によって広く利用されることを願うばかりである。我々も惜しまず協力したい。

図書館の書籍は、貸出と返却のルールのもと、多くの学生諸君が利用している。教員には研究目的のためとして、学生以上に長い貸出期間が認められている。本当にありがたい。とはいえ、書庫の中で読みたい本が見当たらず、すでに借りだされていることがわかった時には、すぐさま出会いたい気持ちが募り、それがかなわないことに苛立ちすら覚えることもある。借りだすことは自らの論理だ。しかし、返却することには自らの論理とともに、本を待つ他の人々へのまなざしという重要な論理が潜んでいることを改めて感じる。

机の上には3週間前に借りだし、必要ページをコピーし終えた書物を放ったらかしにしてあった。拙いこの文を書いている途中、恥ずかしくなり、その3冊を携えて、図書館へ急いだ。

大学図書館長 田和 正孝